

「黒門・唐金橋」再建懇談会
報 告 書

平成18年10月

「黒門・唐金橋」再建懇談会

〔目 次〕

第1	はじめに	・ ・ ・ ・ ・ 1
第2	歴史資料の収集	・ ・ ・ ・ ・ 2
第3	歴史資料の調査（検討）	・ ・ ・ ・ ・ 4
第4	歴史資料の検討	・ ・ ・ ・ ・ 6
	1 黒門の形態及び構法	
	2 唐金橋の形態及び構法	
第5	終わりに	・ ・ ・ ・ ・ 9
別冊	収集資料	

第1 はじめに

秋田藩主佐竹氏の久保田城があった千秋公園は、藩政のなごりを今日に伝える文化遺産であるとともに、明治以来、市民の憩いの場として親しまれてきた。

同公園は秋田駅周辺の中心市街地に立地し、桜やツツジの開花期をはじめ、年間を通じ県内外から多くの人を訪れるなど、県都〈秋田の顔〉として、市を代表する観光の拠点となっている。

しかしながら、長い年月を重ねるにつれ、公園としての資質の存続や市民ニーズの多様化など、解決すべき課題が生じてきたことから、市は平成9年2月に「千秋公園再整備基本計画」を策定し、公園の特色を生かした再整備を進めている。

同計画で黒門（二ノ丸東門）及び唐金橋の再建は、短期及び中期の整備計画に位置づけられ、また、中心市街地活性化への貢献も期待されることから、平成16年度に建都400年を記念し、同施設に関する歴史資料の収集や調査、及び検討などを目的に、私ども6名の委員からなる懇談会が設置されたところである。

黒門及び唐金橋跡は本公園の東側に位置し、現在でも秋田駅からの最短ルートとなっているが、藩政時代には大手門から黒門、黒門から表門が正式な登城ルートであったとされている。市が先に整備した表門との一体的な整備により、藩政の歴史を偲ばせる千秋公園を代表する施設として、役割も大いに期待されるところである。

以上の動機と経過から、当懇談会は、再建のための参考資料や文献が少ないながら、可能な限り、往時に忠実であるべきと考え、調査や検討を重ねてきた。

本報告書は、これまでの全5回にわたる懇談会の結果をとりまとめたものである。

第2 歴史資料の収集

資料の収集作業は、懇談会委員の持ち寄りによるほか、秋田県公文書館、秋田県立図書館、赤れんが郷土館所蔵の資料について、文献のコピー、絵図面の写真撮影などによりとりまとめた。

1 『秋田市歴史絵図』 渡部景一編著

▶ 著書のモノクロコピー

2 城址の移り変わり 「千秋公園再整備基本計画報告書」抜粋

▶ 報告書抜粋をモノクロコピー

3 久保田城絵図関係

▶ 絵図を写真撮影 カラー印刷

・秋田県公文書館

1	出羽国秋田領久保田城下朱印絵図	年未詳
2	御城下絵図	寛保2年
3	久保田御城下絵図	文政5年
4	御国替当座御城下絵図	年未詳
5	御国目付下向之節提出候御城下絵図	文政4年
6	御城下絵図	宝暦9年
7	城下御絵図	寛政年間
8	久保田御城下絵図	年未詳
9	出羽国秋田居城絵図	弘化4年
10	出羽国秋田居城絵図	安永9年
11	久保田城下絵図	寛政11年
12	秋田城絵図	享保13年
13	秋田久保田城絵図	文政4年
14	出羽国秋田郡久保田城絵図	正保4年
15	御城下御要害下絵図	年未詳
16	秋田御城絵図	嘉永2年
17	羽後国秋田郡秋田城郭之図	年未詳
18	羽後国秋田郡秋田城郭図	年未詳
19	羽後国秋田郡秋田城郭之図	年未詳
20	秋田城絵図	年未詳
21	旧秋田城郭全図	年未詳
22	久保田御城下絵図	
23	羽州秋田郡窪田城絵図帳	正保4年

・秋田県立図書館

羽州久保田大絵図

明治17年陸軍省所轄地秋田城廊全図

- 4 「久保田城絵図」 渡部昌一作 秋田県博物館蔵
▶ 絵図を写真撮影 カラー印刷
- 5 千秋公園設計参考図 長岡安平 秋田県公文書館
▶ 絵図を写真撮影 カラー印刷
- 6 写真はがき 赤れんが郷土館
▶ 現物のモノクロコピー
- 7 久保田城跡黒門跡発掘調査報告（平成15年6月）
教育委員会文化振興課 秋田城跡調査事務所
▶ 原本カラーコピー
- 8 石井忠運日記 秋田県公文書館
▶ 原本モノクロコピー
- 9 国典類抄
▶ 原本を再製
- 10 天徳寺史
▶ 原本を再製
- 11 重要文化財・天徳寺山門・総門保存修理工事報告書
▶ 原本モノクロコピー
- 12 水戸城大手門跡発掘調査報告書 水戸市
▶ 原本の抜粋をモノクロコピー
- 13 モダン橋として生まれ替わった大手橋 いばらき新聞
▶ 原本モノクロコピー
- 14 水戸城考 水戸学振興会発行
▶ 原本モノクロコピー
- 15 弘前城維持修理報告書 國寶建造物弘前城修理事務所
▶ 原本モノクロコピー

第3 歴史資料の調査（検討）

収集した資料を懇談会に持ち込み、資料がつけられた時代背景や信憑性などについて調査検討をおこなった。

審議日時及び内容は以下のとおり。

第1回 平成16年12月17日（金）午後1時30分開始

会議兼応接室

1 秋田藩年表

各年代の秋田藩に関わる主な出来事と、歴史絵図に描かれている黒門及び唐金橋を対比した一覧表

第2回 平成17年3月18日（金）午後1時30分開始

会議兼応接室

1 水戸城について

水戸城の大手橋・大手門が建設された年代や概要について江原忠昭氏に回答いただいた資料

2 黒門の呼称について

寛永寺の黒門について

上野黒門町の町名由来について

上野黒門町の推移

鉄門（黒）の例について

第3回 平成18年5月31日（水）午前10時00分開始

秋田県生涯学習室分館ジョイナス小研修室および現地視察

1 現況確認

延長計測、目視による確認

第4回 平成18年7月19日（水）午後1時30分開始

会議兼応接室

1 近世城郭建築の現状

全国の城郭の現存する施設や復元の有無をインターネットと資料により調査

参考文献 名城の日本地図（西ヶ谷恭弘 日竝貞夫共著）

城の鑑賞知識 （三浦正幸）

日本の美術シリーズ

復元イラストと古絵図で見る日本の名城

そのほか城郭関係参考資料

2 現地測量結果報告

平面図確認

3 歴史絵図と現況平面図との重ね合わせ

- ・ 出羽国秋田郡久保田城絵図 正保（1644～1648）
- ・ 御城下絵図 寛保（1716～1736）
- ・ 羽州久保田大絵図 文政（1818～1830）
- ・ 陸軍省所轄地秋田城廊全図 明治17年
- ・ 発掘調査図 平成 4年

第5回 平成18年10月31日（火）午前10時00分開始
秋田市議場棟 第2委員会室

- 1 黒門・唐金橋再建懇談会報告書（案）について
報告書（案）の内容精査・確認

第4 歴史資料の検討

1 黒門の形態及び構法

○文政末期の絵図では、黒門の形は柵形門、正保と明治の絵図では一つの門が描かれているが、その他はだいたい二つの門が直列に並べて描かれてある。

○絵図の門は、四脚門、高麗門、櫓門などで描かれている。

○その絵図の年代や作者、また描かれた目的によって、門を単に記号として捉えたと思われるものもあり、例えば正保4年の出羽国秋田郡久保田城絵図などは、門の形状がほぼ同じに描かれている。

○現地の測量調査において、土塁の等高線の形状を左右対称と考えるならば、園路両側の土塁が江戸時代から形態を変え、当時より間口が狭くなった可能性があると考えられる。

○現存する土塁下の排水溝や石積みの隙間にモルタルをつめた形跡があり、この石積みは後日手を加え移動させたことがうかがえる。

○柵形門の場合

- ・全国の城郭の例からみて、間口の寸法が5間×8間であり、門の横には御番所があったと思われることから、現況の地形では狭く、柵形門には適していないと思われる。
- ・道路側からの視界がほぼ遮られるため、公園として利用していくことを考えると、閉鎖的なイメージや安全保安面に課題が出てくる。

○二つの直列した門の場合

- ・現況で目視できる礎石で柱の位置を考えた場合、唐金橋を渡ってすぐのところにある1つ目の門との間隔が狭いため、礎石そのものの位置が移動している可能性がある。

○一つの門の場合

- ・いくつか残る礎石からどの辺りに位置していたか断定することが困難になっている。

○黒門のいわれを知ることが、部材を選定する手がかりになるのではないかと考えられる。

○『国典類抄』正徳3年項に、秋田藩から幕府への報告文書に登城ルートについての記述があり、門を二ノ丸東御門と表現していることから、門の正式名称が二ノ丸東御門であることと、黒門は通称であることが推定される。

○宝暦9年『石井忠運日記』において、幕府御国目付一行が登城した際の記載がある。ここでは黒御門の語が記されており、この当時には既に「黒門」「黒御門」の通称が成立していたことになる。

○黒門と呼ばれる門は、一般的に柿渋・ベンガラ・黒漆など当時の天然素材で黒く塗装されていた、もしくは鉄製の門であったと思われる。

○黒く塗装するのは、おもに施設の耐久性を目的としており、鉄製は戦術的な理由などが考えられる。

○松本城の黒門は、黒書院側にあるため黒門と呼ばれている。

○佐竹氏の国替えの際に水戸から移された天徳寺の総門は、平成7年改修工事の際、材料の取り付け・見え隠れの各所に漆塗装の痕跡が発見されている。もし、黒門が天徳寺の総門と同じ黒漆で塗装されていたとすると、豪華で高価な門であったと考えられる。

2 唐金橋の形態及び構法

- 『天徳寺史』によると、佐竹氏が楯山の天徳寺に建設した橋は、豪華な太鼓橋であった。
- 『国典類抄』第10巻にある、穴門橋修築の際の家老たちの会話のなかに、橋の反りを1尺から5寸に直させたという記述がある。
- 『国典類抄』第12巻によると、黒門前の堀の幅は、10間から12間前後であった。
- 明治29年に千秋公園の設計を委託された長岡安平が描いた図面に、唐金橋に擬宝珠を付けた太鼓橋が残っている。
- 佐竹氏が秋田へ転封する以前の居城である水戸城は、ほぼ義宣の時代に造られたもので、現存する水戸城の表橋は擬宝珠をつけた唐金橋となっている。
- 秋田八幡神社と水戸八幡宮を比較しても、佐竹氏は城の構成について、基本形式の伝統を守ってきたと推定されることから、この水戸城の表橋を復元することも一案になるう。
- 橋が架かっていた内堀が、県道岩見・船岡線建設の際の道路拡幅で埋め立てられているため、道路利用状況等を考えると当時の寸法での再建が困難である。

第5 終わりに

これまで歴史資料の収集や、調査検討をすすめ、一定の成果をあげてきた。

集められた資料にみられるとおり、久保田城は佐竹義宣による築城後、幾たびかの大火により、約260年の間、その配置・構造が変化しており、歴史的建造物についての詳細な資料も十分に残されていない。そうした現状において、黒門及び唐金橋の正確かつ完全な復元には難しさがあり、いつの時点の門を再現すべきかが重要となろう。

本懇談会では、秋田藩佐竹氏の建築史上の特質等を手がかりに、資料収集や調査検討を進めてきた。絵図や文献などによる検討は概ね尽くされたものと考えられ、今後は現地を発掘調査したうえで、今回収集された資料等と照らし、改めて構法について検討を加える必要があると思われる。

また具体化にあたっては、有効な形態を選定する必要があり、部分的には想定によるところも必要とならざるを得ないと考えられるものの、事実の部分と想定部分を明確にすることが重要になる。

黒門や唐金橋の再建は、久保田城跡の形態を広く県内外に伝えることのできる歴史的な要素であり、今後いっそうの公園利用が期待されると同時に、公園の活性化は秋田の象徴である千秋公園が、末永く存続し続けることに繋がるものとする。

よって、今後、早期に黒門及び唐金橋跡の現地発掘調査が実施され、史実に基づき黒門及び唐金橋が再建されることを期待し報告といたしたい。

平成 18年 10月 31日

黒門・唐金橋再建懇談会

会 長	井 上	隆 明
委 員	伊 藤	武 美
委 員	柴 田	次 雄
委 員	五十嵐	典 彦
委 員	澤 田	享
委 員	渡 辺	英 夫